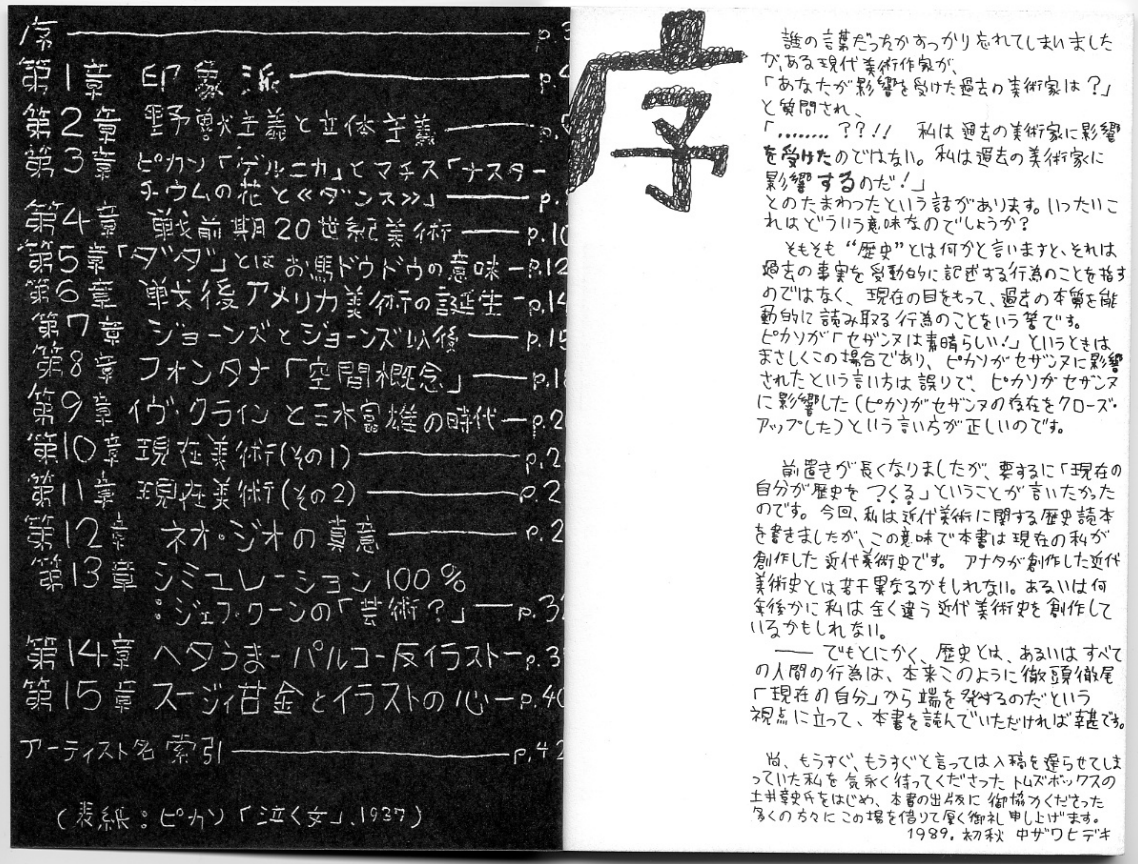


●現在から見た歴史

中ザワ「近代美術史テキスト」pp.2-3 目次、序



●歴史法則主義

中ザワ「西洋画人列伝」冒頭

べきものを言語の権能において語ることにこそ、発話者の使命と考えるからだ。そして、そのための実作業が要約と創造である。具体的には近世以降の西洋に話を限ったことだけでなく、絵画史のみ扱ったり、画家名ごとに項目だてたり、六十画人にしぼったりしたことなどが、暴力と表裏一体の「要約」の作業であった。また、筆者自ら図版を描いたり、文章を一人称で述べたりしたことは、捏造と表裏一体の「創造」の作業であった。もちろん、人選等に多少問題はあっても極端な暴力はあつていないつもりだし、自説を交えた作爲はあつても明らかな捏造はしていないつもりである。

CGで描いた図版に関しても、例えばモーツァルトの楽曲の現代的解釈での演奏が可能のように、ダ・ヴィンチの絵画の現代的解釈での再作も有効だろう。そして、本書に特徴的な列伝形式の自伝であるが、専門外の人にも読みやすいからといって、教養書が陥りやすい些末なエピソード紹介には終始しなかった。人物紹介より、その人に降臨する理論(美術史学での「芸術意志」に近い)の開示が目的である。ならば逆に、動機や必然を制作者本人の語り口で書いた方が、より効果的だろうと考えた。

——とは言うものの、筆者から見ても奇天烈な本に仕上がった感は否めない。本書が学術書なのか小説なのか、文芸書なのか美術作品なのか、はたまた専門家による啓蒙書なのか素人ならのではアイディア本なのかは、おそらくどれでもないし、どれでもあるのだろう。本書が広く愛読されることを願う。

中ザワヒデキ

美術史は理論である

優れた美には、理念がある。理念の呈示には、必然がある。その必然を述べたものが、歴史である。だから、美術史には美の普遍法則が顕現している。——「美術史は理論である」、これが、一見こまざれの本書を背後から支える骨格である。

しかし、これでは最初から破綻をきたしてはいないとも限らない。歴史学における「歴史法則主義」は、個別に事象を見なくては真理が曇ってしまうとする「歴史主義」に、すでに批判されているのである。すなわち、普遍法則という物語が想定されること自体、欺瞞とされるのだ。

また、本書がルネッサンス以降の西洋美術史のみを対象としていることも、この破綻と無関係ではない。教養が目的なら、東洋美術史や古代美術史と並ぶ一冊として本書があればよいのだが、そうならないのは必ずしも偶然からだけではない。美を理論として語るにあたって、西洋美術史こそその土俵であると、いつのまにか判断している節もある。

そのことも関連するが、美と美術は別物である。少なくとも西洋で発展した近代芸術学ではそうなっている。だから美の一言から美術史の統一理論までスライドさせるのは無理である。

しかし、それでもあえて、美術史を理論として語ろうとしたものが本書である。語る